心理学における構成概念と説明

渡邊芳之[注1]

CONSTRUCTS AND CAUSAL EXPLANATIONS IN PSYCHOLOGY

Yoshiyuki Watanabe

Abstruct: Psychological usage of constructs and its methodological limitations were discussed. Any psychological construct can be classified into disposition-concept and theoretical construct with its implications, reductability into observations of behavioral patterns, or existence of surplus meanings. In describing behavioral patterns and classifying individuals, disposition concepts and theoretical constructs are equally usable, but cross-situational predictions and causal explanations of behavior are permitted only in theoretical constructs. Although most theoretical concepts in psychology prove their surplus meanings by corresponding themself with human inner process, their correspondance hardly confirmed with empirical methods.

Key Words: constructs, disposition-concepts, theoretical constructs, surplus meaning

１．問題

心理学においてはさまざまな構成概念が導入され，研究の発展に役立ってきた．現象を構成概念で記述すること，つまり現象に名前をつけることは現象の発見そのものであり，構成概念なくしては心理学のみならず，多くの科学はその存在自体なかったであろう．しかし，構成概念の用法は難しい問題を含んでおり，これまで心理学のさまざまな分野での議論の火種となってきたし，用法の誤りが引き起こす混乱もしばしばみられる．筆者らはこれまでパーソナリティ概念の用法をめぐるさまざまな問題について検討してきたが[注2, 注3, 注4]，そこに見られる問題は，パーソナリティ概念だけでなく心理学で用いられる全ての構成概念に関係している．本稿では，心理学における構成概念の用法を簡単に整理し，そこで見られる問題点を指摘してみたい．なお，紙幅が限られているため，参考文献の参照によって理解できる事項については簡潔に概要を述べるにとどめたことをご了承いただきたい．

心理学で用いられる構成概念は，その意味内容から２つに分類される[注5]．第１は傾性概念（disposition concept）である[注6]．傾性概念は特定の状況下で観察された行動パターンを抽象的に記述しただけの概念であり，概念の意味内容は観察に完全に還元される．また，傾性概念の記述内容は観察が行なわれた場面の先行条件に依存するため，たとえば状況要因が変化した時の記述の正当性は保証されない．同時に，傾性概念は観察された行動パターンの原因がどこにあるかについての情報をもたない．パターンの原因は，行為者の内的要因によるかもしれないし，状況要因によるかもしれないが，傾性概念自体はそれがどこにあるかを示していないのである．いわゆる「操作的定義」のできる概念の多くは傾性概念である．心理学で用いられる「行動傾向」，「行動特性」などの構成概念は傾性概念と考えられる．

第２は理論的構成概念（theoretical construct）である（仮説的構成概念; hypothetical construct とよばれる場合もある）．理論的構成概念は傾性概念と異なり，観察に還元できない剰余意味（surplus meanings）を持っている[注7]．剰余意味は多くの場合，観察された行動パターンを規定する生体の内的過程など，外的な状況要因とは基本的に独立な理論的実体と対応している．その意味で理論的構成概念は状況が変化しても記述の正当性を維持するし，観察された行動パターンの原因についての情報を含むものと考えられる．

注1　基礎臨床心理学講座講師

注2　渡邊芳之，佐藤達哉：パーソナリティ概念を用いた行動説明に見られる方法論的問題点．人文科学論集（信州大学人文学部）;25:19-32，1991

注3　渡邊芳之，佐藤達哉：パーソナリティの一貫性をめぐる視点と時間の問題．心理学評論；36:226-243,1994

注4　渡邊芳之，佐藤達哉：一貫性論争における行動の観察と予測の問題．性格心理学研究;2:68-81,1994

注5　渡邊・佐藤，前掲の１）

注6　Carnap,R.竹尾治一郎訳：The Methodological Charactor of Theoretical Concepts. *Minnesota Studies in the Philosophy of Science;1* Univ.of Minnesota Press,1956．理論的概念の方法論的性格，カルナップ哲学論集，紀伊國屋書店;192-236,1977

注7　MaCorquodale,K & Meehl,P.E. On a distinction between hypothetical constructs and intervening variables. *Psychological Review*;55:95-107,1948

もちろん，ある構成概念を理論的構成概念として用いるためには，その理論的構成概念と関連する行動が状況要因が変化しても一貫しているという証明など，それが持つ剰余意味や状況要因からの独立性を保証する理論的・実証的裏付けが必要である．心理学で用いられる「欲求」，「情動」，「認知」などの構成概念は多くの場合生理的要因などの内的過程と結び付けられており，理論的構成概念であると考えられる．

このように，同じ構成概念でも傾性概念と理論的構成概念とではその指示対象（レファレント）や含意に大きな違いがあり，心理学において用いられる時の効用も異なる．また，傾性概念と理論的構成概念の用法を混同すると，理論的混乱の原因となることがある[注8]．続いて，この構成概念の２分類を念頭に置きながら，心理学における構成概念の用法を整理してみよう．

２．構成概念による行動の記述と個体の分類

構成概念の主な用法が事象の記述であることはいうまでもない．心理学では，人が示す行動パターンや行動の法則性・規則性を構成概念によって記述している．このことは，観察情報を縮約し，伝達を容易にすることに役立つ．この目的において用いられる構成概念は傾性概念であればよく，理論的構成概念である必要はない．スキナー的意味で用いられる「条件づけ」という構成概念は，こうした用途に用いられる構成概念のもっとも純粋な例であろう．あるオペラント反応が自発した時に，それに随伴してなんらかの刺激が与えられると，オペラント反応が増加したり，減少したりする．この規則性に「オペラント条件づけ」という構成概念を適用することで，観察された行動パターンの記述は画期的に縮約されるし，観察されたことを細かく報告しなくても，「条件づけが生じた」と述べれば，効率的に伝達できる．なお，少なくともスキナー的な用法では，「条件づけ」は全て観察に還元される傾性概念である．

条件づけのような「一般法則」の記述ではなく，個人差の記述にも構成概念が役立つ．一定の単独あるいは複数の「行動傾向」を構成概念によって示し，それらの概念が各個人の行動にあてはまるかどうかを記述すれば，個人の行動特性や，その個人差を簡潔に示すことができる．各種のパーソナリティ概念はこの代表的なものである．たとえば「内向性」という構成概念を用いることによって，それと関連する複雑な行動パターンを簡潔に示し，内向性の程度によって個人差を示すことができるであろう．同時に，「この人は内向的だが，あの人は内向的でない」というように，その構成概念があてはまるか否かによって個人を分類することもできる．

こうした用途のために，心理学者はさまざまな構成概念について，それが各個人にどれだけ適合するかを測定する方法の開発に腐心してきた．いわゆる心理テスト，人格測査の類がそれであって，構成概念の意味内容を具体的な行動指標に還元して項目化し，そのひとつひとつが個人の行動にあてはまるかを，多くの場合数量的に判断して，その人にその構成概念があてはまるかどうか判断しようというものである．

記述と分類という用途においては，構成概念は傾性概念であってもよい．ただし，傾性概念によって記述・分類を行なう場合，その正当性は概念の還元先である行動を規定していた先行条件に変化がない限りにおいてしか保証されない．もし「内向性」を傾性概念と考えれば，「内向的な人」は観察された場面においてそうであっただけで，状況要因が変化した他の場面においても「内向的」であるかどうかはわからないのである．しかし，パーソナリティ概念に代表されるこの種の構成概念は，多くの場合理論的構成概念として用いられ，状況要因から独立に行動パターンを生み出している実体と対応すると考えられることが多い．「内向的行動」は内向的な「心」または「精神」という内的実体によって生じ，心や精神は状況要因から独立に行動に影響を与えると考えれば，状況が変化してもその人は「内向的」であり続けると考えられる．しかし，パーソナリティ概念をこのように理論的構成概念として扱うことには大きな

[注8] 渡邊・佐藤，前掲の１）

疑念があるのだが[注9]，この点は後で論ずる．

３．構成概念による行動の予測

心理学における構成概念の用法の第２は，それに関連する行動の予測である．傾性概念であれ，理論的構成概念であれ，構成概念は相互に関連する一群の行動を抽象化したものであり，特定の人が特定の構成概念によって記述されるということは，その人がその構成概念に対応する一群の行動パターンを示している，ということを意味している．そして，現にある行動を示している人は，一定の条件下でその行動を再び行うことが予想される．つまり，ある構成概念が適用されるような人は，その構成概念に関連するような行動を，今後行うであろうことが予測されるのである．なんらかの心理テストによって「内向性がある」と記述された人には，今後も「内向的」な行動パターンをとることが予想されるし，それゆえ心理テストが適性判断，虞犯少年の発見などに利用されるのである．しかし，構成概念の行動予測力は，それが傾性概念であるか，理論的構成概念であるかによって異なる．

傾性概念の場合，現在観察されている行動パターンや行動の規則性の持続は，観察場面にあって，そうしたパターンを生み出しているさまざまな先行条件の持続性に依存している．したがって，傾性概念からそれに関連する行動が予測されうるかどうかは，観察場面と予測が必要となる場面とで，先行条件が同じであるかどうかによって決まる．先行条件は主に行為者の内的要因と状況要因からなるが，内的要因は場面の変化による変化が比較的少ないと考えれば，傾性概念の予測力は観察場面と予測場面との状況要因の一致性によっておよそ定まると考えてよいだろう．「内向性」を傾性概念と考えた場合，学校での行動観察からある子どもが「内向的である」と記述されたならば，その学校においてその子が以後も「内向的」な行動をとることが予測される．しかし，予測の基盤となる「内向性」は先行条件に依存するのだから，たとえば家庭においてもその子が「内向的」な行動をとるかどうかは，その子にとって学校という状況と家庭という状況がどれだけ類似しているかにかかっているだろう[注10]．反対に考えれば，傾性概念による行動予測の精度を上げるためには，観察場面と予測場面の状況的類似性を高めればよいわけで，状況の類似性についてなんらかの指標を得ることができれば，特定の傾性概念による特定の場面での行動予測力を推測したり，制御したりすることができる．

一方，理論的構成概念による行動の予測は，状況要因などの先行要因が変化しても可能である．理論的構成概念は状況とは独立した（物理的な，あるいは心的な）内的実体と対応しており，状況がいかに変化してもその行動規定力は変化しないから，状況を越えた行動の予測が可能なのである．「内向性」が理論的構成概念であるならば，学校において観察された「内向性」はその子どもの「心」の中にある傾向であり，状況から独立と考えられるから，学校だけでなく家庭でもその子が「内向的」な行動を示すことが予測されるのである．しかし，理論的構成概念の行動予測力を考える時には，やはり状況要因との関係を考慮しなければならない．理論的構成概念と結びついた内定要因の行動規定力が強く，どのような状況の下でもその行動が必ず生じるような場合と，行動規定力が弱く，状況要因が強い場合にその行動の出現が阻害され得るような場合とでは，理論的構成概念からの行動予測力は大きく異なる．たとえばあきらかに生理的過程である「反射」は非常に行動規定力が強く，多くの反射はそれを引き起こすような刺激が与えられる限り，どのような状況下でも生じる．したがって「反射」という理論的構成概念による行動の予測力は状況要因にあまり影響されない．

ところが，多くの心理学的な理論的構成概念

注9 Mischel,W. 詫摩武俊監訳：Personality and Assessment.Wiley,1968．パーソナリティの理論～状況主義的アプローチ，誠信書房，1993

注10 行動に影響する複数の状況の類似性は，行為者にとっての状況の意味の類似性に依存するのであって，客観的・物理的な類似性では判断できない．北村は物理的な状況を「状況」，個人にとっての状況の意味を「情況」とよぶことで，２者を区別している．以下の文献を参照．
北村晴朗：パーソナリティを考える～二段階の接近法の試論，性格心理学研究;1:2-14

はこれほど強い行動規定力を仮定していない．たとえば「欲求」は確かに人をつき動かすだろうが，さまざまな状況要因は欲求がそのまま行動につながることを常に阻害しようとするだろう．困ったことに，各理論的構成概念のこうした行動規定力を推測することは非常に困難である．つまり，理論的構成概念は状況要因の変化にかかわらず行動を予測することができるが，その予測力がどのくらいであるかは，予測してみなければわからないのである．もちろん，概念が構成された観察場面と予測場面との状況的類似性を高めれば理論的構成概念による予測力も向上するだろうが，それではせっかく理論的構成概念である意味がなくなってしまう．

つまり，行動予測の普遍性という意味では理論的構成概念の方が有利であるが，実際に予測を必要とする場合には傾性概念で十分であるし，むしろ傾性概念の方が予測力を制御しやすい点で有利であるともいえるのである．ただし，傾性概念と理論的構成概念とを混同して用いた場合，本来状況要因の変化した場合の予測力が仮定されていない概念から，別の状況での行動をも予測しようとするといった間違いが生じやすい．とくに，素朴な認識は人の行動を規定する状況要因を捨象して，その原因を心的要因に求めやすい傾向があるので注意が必要である[注11]．

４．構成概念による行動の説明

心理学における構成概念の用法のうち，最も微妙であるのが，行動の説明に構成概念を用いる場合である．ここでいう説明とは，観察された行動パターンや行動の規則性が「なぜ生じているのか」という原因論的説明を指す．心理学者に限らず，科学者は事象を観察し，記述するだけでは飽きたらず，それがなぜ生じるのかという原因論的説明を求めるし，多くの科学者は事象の記述や予測自体も原因の探究によってより精密に保証されると考えている．心理学者が主な研究対象とする人間の行動パターン，行動法則についても，このことはあてはまるだろう．

傾性概念は，こうした用法からは最初から除外される．これまでくりかえし述べてきたように，傾性概念は一定の条件下で観察された行動パターンを抽象的に記述しているだけで，パターンの原因についての情報を含まない．いわば，傾性概念は観察された行動パターンそのものにつけたラベルに過ぎないのである．したがって，傾性概念からそれによって記述された行動パターンを原因論的に説明しようとすれば，トートロジー（同義反復，循環論）に陥る．先にあげた傾性概念としての「条件づけ」概念の例でいえば，「オペラント行動に強化刺激を与えたらその行動の頻度が増えたのは，条件づけが生じているからだ」という説明は一見もっともらしいが，実際には何も説明しておらず，無意味なのである[注12]．

原因論的説明に用いることのできる構成概念は，理論的構成概念である．理論的構成概念は観察された行動パターンに還元されない剰余意味をもっているから，それから行動パターンを説明することは，少なくともトートロジーにはならない．それだけでなく，理論的構成概念がもつ剰余意味は，多くの場合そうした行動パターンを規定する，状況から独立の内的要因と関係しており，その意味でも原因論的説明に用いるのに適当である．理論的構成概念としての「内向性」は人間内部の心的実体（「心」や「精神」）と対応しており，彼の「心」が「内向的」な傾向を帯びていることが，彼の行動に影響して，内向的な行動をとらせるものと考えられる．この場合，心的な「内向性」は内向的な行動パターンに時間的にも因果的にも先行すると考えられるから，「内向性」という構成概念から内向的な行動パターンを説明することには何の問題もないであろう．「欲求」や「動因」など，行動に先行する内的過程あるいは内的エネルギーと結びついた構成概念は理論的構成概念であり，これらの概念からそれと関連す

注11 筆者から見ると，心理学者の多くは人間行動について一般人よりもよほど素朴な認識を持っているようなので，なおさら危険である．渡邊・佐藤（前掲の１）も参照

注12 こうした無意味なトートロジー的説明は，心理学者のもっとも得意とするところである．「自分がどう生きていったらよいかわからないのは，あなたのアイデンティティが混　乱しているからなのです」などという無意味な言説は日常いくらでも見ることができる．

る行動を原因論的に説明することができる．

このように，構成概念からそれと関連する行動を原因論的に説明するためには，その概念が観察に還元できない剰余意味をもった理論的構成概念であることが必要であり，観察に還元されてしまう傾性概念による行動の説明はトートロジーになる．したがって，ある構成概念から行動を原因論的に説明しようとするなら，その概念に観察に還元できない剰余意味があることが保証されていなければならない．

５．理論的構成概念の剰余意味の保証

ある構成概念の剰余意味を明らかにし，それを理論的構成概念として用いようとする場合，もっとも有効なのはそれを人の内部にあるなんらかの実体（過程，エネルギーなど）と関連づけることである．生理的反応や筋肉運動などに関する構成概念の場合，それは比較的容易である．観察された反応パターンを生み出す生体内部の機構を解剖学的あるいは生理学的な方法で明らかにし，概念をそれと結びつければ，構成概念は観察された反応パターンには還元されない意味をもつようになり，反応の原因論的説明に用いることができる．しかし，多くの心理学的構成概念においてそうした方法で剰余意味を見出すことは困難である．たとえばさまざまな「欲求」や「動機づけ」の源泉の所在を明らかにし，その過程を解剖学的に明らかにすることは，本能的な一次的欲求であればともかく，「親和欲求」など社会的欲求ではかなり難しいだろう．ましてや「内向性」や「劣等感」などといった心的概念の源泉を解剖学的に明らかにすることはできそうにない．心は物理的な意味での実体ではないからである[注13]．

したがって，心理学的構成概念の多くは理論的に内的過程と結び付けられていることだけを根拠に，理論的構成概念として用いられている．ハルは学習を説明するために用いた数多くの構成概念をやはり理論的に生理的過程と結びつけることによって，それらの概念を理論的構成概念として用いたし，アイゼンクをはじめとする多くのパーソナリティ理論家も，行動の観察から導かれたパーソナリティ概念を理論的に内的過程と結びつけて，それを行動の原因論的説明に用いようとしている．しかし，こうした心的概念と内的過程との結びつきは，どれも理論的に（多くの場合は恣意的に）仮定されているだけであり，実証的な根拠によって保証されていることはまずない．

６．行動の通状況的一貫性と観察されない状況要因

心的概念が内的過程との対応がないまま理論的構成概念として用いられる場合，その剰余意味の根拠としてよく用いられるのは，その構成概念が記述する行動パターンの通状況的一貫性である．もしその概念が傾性概念にすぎなければ，そこで記述された行動パターンは状況要因などの先行条件の変化に応じて変容し，通状況的な一貫性はもたないであろう．しかし，もしその概念が理論的構成概念であれば，それによって記述される行動パターンは状況要因とは独立の内的過程によって規定されているのだから，状況が変化しても一貫して観察されるであろう．多くのパーソナリティ概念が理論的構成概念として状況を越えた行動予測や行動の原因論的説明に用いられるのは，人の性格が状況要因によって変化せず，一貫していると考えられているからである[注14]．

しかし，こうした論理には欠点がある．行動パターンがある特定の状況要因の持続性によって維持されている場合に，観察者がその状況要因を観察できなかったり，あるいは観察しなかった場合，他の状況要因の変化と行動パターンの一貫性だけが観察されて，あたかも行動パターンが状況を越えて一貫しているように見えてしまうのである．この場合，こうした行動パターンを記述した構成概念は傾性概念に過ぎないのに，理論的構成概念として扱われる．とくに，観察者の側にその概念を理論的構成概念として考える構えがある時に，こうした過ちが起こりやすい．そこに存在するすべての状況要因

注13 こうした心的概念の諸性質については以下の文献を参照．Ryle,G.坂元百大，宮下治子，服部裕幸訳：The Concept of Mind. Hutchinson 1949.心の概念，みすず書房，1987

注14 渡邊・佐藤，前掲の１）

を観察することが実質的に不可能である以上，関連する行動の通状況的一貫性から理論的構成概念の剰余意味を確認しようとする論理は，この「観察されない状況要因」の問題から自由になれないのである．

７．理論的構成概念と時間的パースペクティブ

一方，全く同じ状況において複数の個人を観察した時に，その行動パターンが異なっている場合，その個人差は観察内容に完全に還元できないし，個人差は状況要因以外の要因，つまり行為者の内的要因によって規定されていると考えられるから，それを記述した構成概念は理論的構成概念として用いられる[注15]．パーソナリティ概念の構成にはこうした同一状況における行動の個人差の観察が寄与することが多いことも，パーソナリティ概念が理論的構成概念として用いられる根拠のひとつである．しかし，こうした論理は思考の時間的パースペクティブを観察時点だけに限定した場合においてのみ有効である．時間的パースペクティブを過去にまで広げると，観察された個人差を観察に還元できる可能性がでてくる．同じ状況での行動の個人差は，それと類似した状況での過去経験の違いに起因しているかもしれないと考えれば，そうした個人差は過去の状況要因という観察可能な外的要因に還元することができ，個人差を記述する概念は傾性概念となる．逆に，観察のパースペクティブを無理やり狭くすれば，傾性概念だったものを理論的構成概念にすることもできる．たとえば「条件づけ」の例で，条件づけが成立した直後だけに観察を限り，そこから見たら過去である条件づけ過程を意識的に無視した上で，条件づけた個体と条件づけていない個体とを同時に同じ状況下で観察すれば，同一の状況下で行動の個体差を観察することができる．そして，本来観察可能な要因に還元できていたその個体差は，観察可能な要因には還元できなくなるのである．「欲求」や「動機づけ」といった心理学的概念のある部分は，こうした観察パースペクティブの恣意的な限定によって理論的構成概念に仕立て上げられている可能性がある．ある構成概念を理論的構成概念として用いる時には，研究者による恣意的な時間の切り取りが生じているのである．行動をとりまく時間の流れが，本来は連続的なものであることはいうまでもなく，それを恣意的に切り取ることは決して奨励できることではないだろう．

もちろん，過去の経験とか，過去の状況要因は現前しないから観察することはできない．しかし，だからといってそれらの存在を意識的にせよ，無意識的にせよ無視して個人差概念を内的過程と対応する理論的構成概念として状況を越えた行動予測や行動の説明に用いた場合，個人差を実際に生み出してきた重要な要因を見落す可能性がある．この点で，ある概念を傾性概念として用いるか，理論的構成概念として用いるかは，研究者の時間的パースペクティブによって恣意的に選択可能であるともいえる．傾性概念として用いるなら，状況を越えた行動予測や行動の原因論的説明はできなくなるが，行動のありかたを広い時間的パースペクティブからとらえることができるし，理論的構成概念として用いるなら，行動予測や説明の可能性は広がるが，理論的思考の時間的パースペクティブは狭くなるであろう．同時に，心理学者が人の行動を構成概念を用いて説明しようとする時には，大なり小なり時間を恣意的に切り取ってしまっているのだということも，常に意識されるべきである．

８．まとめ

これまで検討してきたように，人間行動の理解に構成概念を用いる場合，状況を越えた行動予測や行動の原因論的説明といった高度な用途が求められるなら，それは観察に還元されない理論的構成概念でなければならない．しかし，とくに心的・精神的過程との対応によって剰余意味が仮定されるような構成概念では，剰余意味を保証する手続きに大きな問題点が見られる．そうした問題点がもっとも浮き彫りになったのが，パーソナリティ概念をめぐる論争であ

注15　ただし，観察者からは「全く同じ状況」に見えても，複数の行為者の観察時点ごとに実際には状況要因に変化があり，観察者がその状況要因や変化に気がついていない場合も考えられるが，ここではその可能性は除外する．

る[注16]．論争はパーソナリティ測査の行動予測力をめぐる議論から始まったが，結果としてそれまで仮定されていたパーソナリティ概念に関連する行動の通状況的一貫性をめぐる「一貫性論争」に発展した．それまで自明のものと考えられてきたパーソナリティ概念の理論的構成概念としての地位が疑問視され，それまで等閑視されていた個人差への状況要因の影響が認識されるようになった．その結果，現在ではパーソナリティは従来のように行動に因果的影響を与える内的要因と考えられるよりも，内的要因と状況要因の相互作用の結果生み出される行動パターンそのものと考えられるようになった[注17]．つまり，パーソナリティ概念は理論的構成概念ではなく，傾性概念であることがわかってきたのである．同様の理論的変換は，今後「欲求」や「動機づけ」といった多くの心理学的概念についても生じてくると予想される．

たしかに行動を記述したり，そこから個体を分類したりという構成概念本来の控え目な用法に限っては，それが傾性概念であるか理論的構成概念であるかということは重要ではない．しかし，行動の予測や説明という高度な用途においては，用いる構成概念の性質を良く理解し，傾性概念と理論的構成概念を区別して用いることが要求される．この区別を欠いた場合，行動の理解は無意味なトートロジーや誤った予測などによって妨害されるのである．心理学でよく用いられる質問紙法調査や質問紙式の心理テスト法で得られる結果は，さまざまな工夫で行動を記述しているに過ぎないし，それらが導き出す概念が傾性概念であるか理論的構成概念であるかは多くの場合全く検討されていない．しかし認知主義的志向が流行している現在の心理学では，質問紙法で得られたデータや，単純な行動観察データが，何の検討もなく内的な「認知過程」の要素として扱われている例が数多く見られる．また，「内発的動機づけ」など，特定の条件下における行動パターンを抽象化したにすぎない概念が理論的構成概念として扱われ，一人歩きしている例は枚挙に暇がない．こうした混乱は結果として無意味な言説，無意味な研究を生み出すだけだが，混乱の原因はすべて構成概念の性質と用法に対する無関心にあるといえるだろう．

先にも述べたように，他の科学者と同様，心理学者は観察した事象を原因論的に説明することに大きな魅力を感じ，その実現を急ぐ．彼らが傾性概念に過ぎないものを理論的構成概念と間違えて用い，無意味な説明に陥りやすいのも，原因論的説明の魅力の故であろう．しかし，心理学が用いる構成概念のうち，理論的構成概念であることが明確に保証されるものはほとんどない．たしかに，一定の条件がクリアされていれば，ある構成概念を傾性概念として用いるか，理論的構成概念として用いるかは研究者の恣意に任されてもよいだろう．とはいえ，観察されない状況要因の問題や時間的パースペクティブの問題など，理論的構成概念としての用法にまつわる問題点を意識することは常に重要である．

注16 Mischel，前掲の６），渡邊・佐藤，前掲　の１～３）

注17 パーソナリティに関するこうした考え方は「相互作用論」と呼ばれ，今後のパーソナリティ心理学の中心的な位置を占めると予想されている．以下の文献を参照．

堀毛一也：社会的行動とパーソナリティ，大坊郁夫，安藤清志，池田謙一編：社会心理学パースペクティブ１；207-232,1989